

嵐の時代に向って

松山義則

このところわれわれがしばしば耳にする言葉には国際間の経済摩擦、輸出超過、円高ドル安による産業構造の再編、金あまりや低金利にともなうマネーゲームの過熱など、さらに加えて、自由化、国際化、あるいは第三の開国などという表現であります。

いまから一二〇年をこえる幕末のころ、同志社の創立者新島襄先生は、世界の精神、文化、学問の探求を意図して海外に脱出しました。そしてまことに劇的な生涯をつらぬきとおしましたが、彼の願いは、神の前に平等である人類を愛するという真実の国際主義を同志社教育のなかに活かすことであり、まことの国際主義にねざす人物の養成、真正の自由に生きる自覚的な人格の育成にありました。

この新島先生の願いは、現在、耳にする国際化、自由化という言葉とは質的に異なったものであると思います。国際化、自由化は、国際的軋轢を避けるための手段であり、技術的な道具的な方法であり、これによって自国なり自分の利益を守り、高めようという意図

を感じざるをえません。内なる国際化という言葉にしたところで、外的な、制度的な国際化努力ではなく、人間が国際的感覚を身につけ、国際的教養に生きることを言うのであります。新島が、これも新島が念願した国際主義からははるかに遠いものと思われまします。

人間は、本来、自己保存、自己主張、自己達成からのがれることはできません。そこには自己と他者との対立、競争があり、また憎悪や嫉妬があります。人間は、自己の目や耳といった自己に属する感覚から情報を得て、自己のもつ世界の中でこれを消化し処理して、いますが、自分が見る外的環境も、自分が考える内的思想も、自己に属するものであり、自己のもつ感じ方や考え方の枠にしたがって整理され体制化されてます。自己のもつ感じ方や考え方の枠は、自己の利害や主張と強いかかわりをもつものであり、自己のもつ世界が周囲の人のもつ世界とほぼ同一に近く、あるいは重なりあっている間はよいにしても、所詮は相別れ、確執を生むのであります。個人と個人との間、国と国との関係をすべて同一に論じることは無理があるとしても、そこにはたらく原理には似かよったものがあると思えます。

聖書のなかに、水の上を歩くイエスの物語があります。弟子たちは逆風の吹きすさぶ波立つ湖水の舟のなかにいました。夜明け近く、イエスは海の上を歩いて彼らの方へ行かれました。弟子たちは幽霊だと思い、おそれのあまりに声を出したと言います。イエスはすぐに彼らに声をかけられて、「しっかりしなさい。私です」と言われました。舟にいたペテロは、「あなたでしたか。それでは、私に命じて、水の上を渡ってみもとに行かせて下さい」、イエスが「おいでなさい」と言われたので、ペテロは舟からおり、水の上を歩い

てイエスのところに行きました。しかし、風をみて恐ろしくなり、そしておぼれかけたので、彼は叫んで、「主よ、お助け下さい」と言いました。

この物語はいろいろと解釈されるのでありましようが、嵐のなかのうかぶ小舟にのるペテロや弟子たちとは、われわれ一人一人の人間の境遇であると思います。さわやかに晴れわたった日もあります。しかし嵐のふきすさぶなかに、恐れおののく日々を避けることはできません。まことに人生とは水の上を歩くという、あやふやなものであります。同志社の一人の先輩である大山寛牧師は、「それでもイエスから目を離すとたちまち沈んでしまいます。そして、海獣の餌食となるのです」とその説教集のなかで教えられています。

「水の上を歩く」という、人間には不可能なことを主題とした物語を、すくなくとも人間の在り方の象徴として考えることができるでしょう。人間は水の上に足をおけば、直ちに湖底に沈む存在です。しかも、その湖水の上には、はげしい嵐が吹きすさんでいます。思想のあらし、生活のあらし、愛憎のあらしのなかで、人間は日々をすごさねばなりません。人間は互に争い、主張しあい、そして直接に自己や自分の属する集団を防衛し、保存するために神経をすりへらすだけではなく、平等や自由などの理想をかかげますが、これさえも、その多くは自己保存、自己繁栄のための口実でしかすぎなかったことは世界の歴史の語るところでありました。

高度成長の時代には、多くの人がびとが、仕事に熱中し、仕事中心の生活のなかで、清く正しく生きることを願ったのに対し、ものの豊かにあふれている現在では、むしろ、自分の趣味に生きることを願う人びとが多くなったという調査報告があります。調査とその結

果の解釈は、多くの場合、平面的、数量的になりがちで、人びとの深奥にある思いにふれることはできないにしても、なにか、そこには不安定な、うつろなものを感じざるを得ません。

卒業生諸君は、わが国がはじめて経験した豊かな社会に育ち、そしていま、実に不確定な、不透明な将来にむかって旅出たれようとしています。今日の豊かさは、いつまでも保証されているとはかぎりません。個人の水準で言っても、つねに幸運と健康と生命とが明日の日に保証されてはいません。いろいろととりつくり、理想をかかげていても、人間とは、水の上を歩くような、水没に頻することに宿命づけられた不安定な存在であります。

われわれは、人間の弱さと、時代、社会の不安定さ、将来の予見不可能性、人の世のたえがたいさびしさを感じるときに、はじめて自分を、いま生かしている不思議な大いなる力を求めざるを得ません。あの嵐ふく湖水の上にあつて、じつとイエスを見つめ、目をばなさなかったペテロのなかに人間の生きざまを見ることができると思えます。国際化、自由化が波よせてくるこの嵐の時代に、卒業生諸君は、けわしい道をひとりひとり孤独にもたえて歩まねばならないでしょう。楽しいときもあります、友人と打ち興ずることもあります。成功に自信をもつときも当然あると思います。しかし、失意のときにも得意のときにもどのようなときにも自分を生かしている大いなる力を思い、その力によって生かされているという信念をもって自分を喪失することなく、一步一步、道を歩みつづけて下さい。卒業生諸君のご健康とご多幸とを心から祈ります。

(同志社総長)

神秘の聖手

原 正

同志社大学を卒業される皆さんに心からお祝いを申しあげます。

同志社英学校は明治八年に創設されましたが、はじめて卒業生を社会に送り出したのは明治十二年六月十二日のことでありました。このときの卒業生は、すべて熊本洋学校から来た人達で、山崎為徳、海老名弾正、和田正修、森田久万人、不破唯次郎、市原盛宏、宮川経輝、横井時雄、加藤勇次郎、浮田和民、金森通倫、小崎弘道、下村孝太郎、吉田作弥、岡田松生の十五名でありました。

人数こそ十五名でありましたが、この中には日本の近代化過程で極めて大きな足跡を残された人が多く、同志社の大きな誇りとなっております。この第一回卒業式における新島校長の告辞では、昔の中国の春秋時代における郭隗かくわいと楽毅がくぎの故事を引用し、次のように述べておられます。「私は、いまや、ちやうどこの郭隗の役目を果したいと思っております。みづからを反省するとき、私自身、教育による救国の大業に適任であるなどとは決して考えておりません。しかし、これまで他にあたられる人もなかったので、「まず隗より始めよ」の考えから、私自身あえて一身を挺して、この聖業

に当たつたわけであります。もとより、この聖業は私一人で成就できるようなものではありません。私は、ただ先導的な隗の役目を果たしたまでで、私の後に天下の賢人としての樂毅が現われ、その大役を果たされることを願っております。

それでは、その樂毅の大役を果たすのは誰でありましょう。私は固く信じております。いまわが校を卒業して社会にその第一歩を踏み出そうとしておられる諸君、その諸君こそ、まさしく樂毅でなければなりません。私は、愛する日本のため、そしてまた愛する三千余万の同胞のため、この大業の大成を、切に切に諸君の力にまつものであります。私は、心から諸君に信頼し、樂毅たる諸君によつてこそ、わが校の遠大な真目的が達成されることを願つてやまないのであります。」

そして最後に新島校長は、次の英語で告辞を結ばれました。

“Go, go, go in peace! Be strong. A mysterious hand guides you.”

第一回卒業式の間行われた明治十二年からすでに百年以上を経過し、世相も大きく変わつてしまつた今日ではあります。新島校長の卒業生に対する信頼と期待と願いは、そのまま私の心でもあります。

偉大な教育者であり、また人格者でもあつた新島校長のお心のうちは、私のよく理解できるところではありませんが、最後の結びは、すばらしい激励の言葉であり、教訓であり、そして何よりも人間の生き方の真髓を示しているように思われなりません。「神秘の聖手が、きっと導いて下さる」という言葉は、新島校長の一生を通じて得られた結晶であり、愛する卒業生ひとりひとりに対する最大の贈物でありましょう。

この贈物は、新島校長の生いたち、西洋の文物に憧れた命がけでの脱国、異境の地で孤独に耐え

ながらのひたすらな刻苦勉勵、歐米文明の底流にあるものの発見、日本の近代化に不可欠なキリスト教主義大学設立の決意、幾多の困難を克服しての同志社の創設などを知ることによって、より良く理解できるものでありましょう。卒業生の皆さんには、この新島校長の言葉の意味するものを、是非とも、しっかりと掴んで門出していただきたい。

人間は、もともと自分本位で、利己的な考え方や行動をするものです。しかし、そのような生き方が決して満足できるような人生につながらないし、また行きづまってしまうことは、火を見るよりも明らかであります。

世のため、他人のために自分を捨てて尽すことによって、はじめて自分の道を見いだし、また自分が救われるということは、キリスト教の基本的な教えであります。私達が自分自身を大切にするのは、まさに前述の生き方を達成するためであります。このような生き方に立ち、ひたすら祈り、努力する人には、新島校長が述べられたように、神祕の聖手がきつと導いてくださると私は確信しております。

皆さんは、同志社大学での勉強やサークル活動などを通じ、最初はとても不可能と思われるようなことでも、われを忘れ祈るような気持で全力をもって当ることにより無事達成できたとか、あるいは人間わざとは考えられないような成果が得られたなどの経験を、恐らくおもちのことと思います。このような経験は、皆さんの将来にとって貴重な宝であり、また、より良く生きるための自信ともなりましょう。

卒業生諸君が平和で力強く進まれることを心から祈ります。

(同志社大学長)

より高く、より人間的に

岡野久二

現代社会の変化の激しさは筆舌に尽し難いものがある。その変化の動向を予測することができないために、不確実の時代とか不透明の時代とかいわれてきたが、現在はエレクトロニクスを中心にした科学の技術革新によって、高度な先端技術の大衆化の時代を迎えている。ワープロ、パソコン、電子カメラと日常生活の色々な面でエレクトロニクスが活躍しているが、それにデジタル・オーディオ・テープとかキャプテンと呼ばれるビデオテックスやコンパクト・ディスクが加わって、オプトロニクス（光技術）社会へと移り変わろうとしている。これらは基本的にはレーザー光線で情報をうち込んでいるわけで、二〇センチぐらいのディスクのなかに五万ページの大百科辞典も入ってしまう代物である。だから、これからは家庭におけるブラウン管を支配するものは何かというところが問題になる。テレビかVTRか、ディスクかファミコンか、パソコンか、ビデオテックスか。家庭の光の映像を押えるものは何になるか。まさに、オプトロニクス時代である。また、生物学的

な面に目を向けると、バイオテクノロジーが大きな話題となり遺伝子の操作によって、人間とか生物へ大胆な挑戦がなされようとしている。ちょうどニュートンの物理学が十八世紀にとって重大な意義をもち、ダーウィンの「進化論」が十九世紀後半に新しい知的風潮をもたらしたようなものである。今日のわれわれは「進化論」には慣れているが、一八六〇年代の人たちにとっては、あの学説は人間に対する驚くべき啓示であった。それまでは、神によって創造された人間は下級の動物と區別される魂とか理性をもっていると信じられてきたが、新しい福音ともいうべき科学が、人間を猿、または類人猿の子孫と断定したのである。宗教界の人たちはこの学説を人間に対する恐しい冒瀆と非難し、一般人も祖先が猿といわれて憤怒した。しかし、時と共に論争は静まり、人々は進化論的立場、すなわち「生存競争」や「適者生存」といった角度から物を考えるようになり、人間は自然の一部としての生物学的存在であることが定説となった。科学理論によって人間の人生観まで変化を起したのである。この進化論と同じような大きな異変がバイオテクノロジーによって引き起こされる可能性がある。生体系科学の大転換期の到来である。下手をすれば人間の存在そのものが脅かされる危険があり、冗談でなく、新人類が生まれ出るかもしれない時代を迎えている。

このように、科学の面では一寸先を予測することができない進歩や変革が起っているが人間の本質は科学の高度成長に比例して向上しているとはいえない。科学万能の社会の中で今、一番必要とされるのは「より人間らしい社会を創ること」である。人間が科学技術と同じように高度な成長をし、人間の尊厳を守ることである。そのためには、人間が自己をしっかり認識し、科学にふり廻さ

れることなく、人間性を高める努力をする必要がある。十九世紀のイギリスの詩人、アルフレッド・テニソンは「自分に対する尊敬、自分についての知識、自分に対する抑制、この三つのもののみが生活に絶対的な力をもたらす。」といっているが、自己を知り、自己を練磨することが人間としての向上につながる。そして自己を高めてゆくことが、ひいては社会のために役立つ人間になるのである。

校祖新島襄先生は同志社を卒業してゆく学生に対して、「今日我国には智者もある、学者もある、官吏もある、新聞記者もある。然し、彼らは未だ以て天下を経営するに足らず。諸君よ、諸君は須らく自ら進んで天下を経営するの任に当らなければならぬ。願わくば諸君は天下の為に死せよ、之れ襄の切に望み、偏に希うところである。」と述べられた。世の中には自分の立身出世や利益のためのみ生きる人が多いが、新島先生は「自ら進んで天下を経営する任に当れ」と教えている。これは、天下を取る人物になるとか、大臣になれということではない。自分の置かれた立場で自分の職務を忠実に果す人物になることが、社会のため、国家のためになるという意味である。また、「天下の為に死せよ」とは、聖書の句に、「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」(ヨハネ十二・二四)とあるが、一粒の麦も自己を犠牲にしてこそ、はじめて多くの実を結ぶのと同じように、人間もこの精神がなくして社会において大きな活躍をすることはできないということである。死をも恐れず、常に国を憂え、信ずる教育理想に向かって前進努力された新島先生の生涯は身をもってこの教えを実行された

ものといえる。病弱に頼たよらうって教育と伝道のために尽された先生の不屈の精神は明治二十三年一月一日療養先の大磯の地で詠まれた次の漢詩によく表われている。

送歳休悲病羸身 鷄鳴早已報佳辰

劣才縦乏濟民策 尚抱壯図迎此春

病びょうに倒れた身でありながら、なお壯図を抱いて新春を迎えられた先生の決意は壮烈なものであり、これが三週間後に永遠にこの世を去って行った人の感慨とは思えない。明治二十三年は先生の生涯の念願であった大学の実現を計る年であったことを考えると、その年頭の決意は想像を絶するものがある。常に国を思い、国のためには身命を賭して努力する、それが新島精神の真骨頂である。

同志社で学んだ新しい卒業生の諸君は新島襄の生きざまは良く承知していることであろうが、これからの実社会での生活では、新島精神が人生の指針として貴重なものとなる。科学万能の世相に自己を埋没させることなく、常に自己を見詰め、高め、新島精神にのっとり、社会のため、国家のためにあらゆる分野で活躍されんことを心より祈っている。

(同志社女子大学長)